



目 次

信心と精進.....	本多日生
菩薩行に就て.....	本多日生
鳥と梟の合戦.....	長谷川義一
聖訓摘要.....	本多日生
各地教信.....	本多日生

第三十三号五月



四月發行 本多日生著

信仰修養、思想より論じたる

# 日蓮主義の本領

五二八頁  
定價金貳圓五拾錢

## 目次 (總の部)

- 一、信仰と修養と思想
- 一、信仰修養思想と立正大師
- 一、教育勅語の解釋と應用
- 一、思想の基準

## (信仰の部)

- 一、眞の佛と眞の我
- 一、信心と正憶念
- 一、菩薩行

右は中央出版社の發行なるも統一發行所へ申込まるれば二割定價より割引する事となれり希望者は統一發行所へ申込まるべし

## (修養の部)

- 一、新時代の婦人の修養
- 一、佛敎の六善事
- 一、日蓮聖人の人格

## (思想の部)

- 一、國と人と敎
- 一、東洋思想の大共通點

以上

# 信心と精進

本多日生

その信力の活躍する所は即ち道德的の行動である、それではなければ意味を成さぬ。今の日本佛敎徒のやうに、信仰といふものを貧弱低劣に説き切つて、成べく簡單な方が宜いのだと言つて競争をして居るやうな、この惡風潮は大きな間違ひであつて、人生を毒するものである。釋尊の敎を傷けるのみではない、人生を毒するものである。

さういふ意味が一つ了解せられると、信心からいへばその活動が活躍して來るのである。さて今日はその總ての問題を話さうとするのではない、たゞ原則としてさういふ點を申述べて置いて、さうして「信心と精進」といふことの關係を話して見たいと思ふ。精進といふことは、善い事を選別けて、さうして

進んで行くことを申すのである、精の字は糠を取つて精米にするやうに、粕を捨て、行くことで、人間は總てくだらんことが澤山あるから、つまらぬ事に力を入れないやうに、選別けて善い事に力を入れるといふ、その行爲の價値を批判してそれを選択することを精と申すのである。これは非常に大事なこと、人間の壽命といふものは割合に短いものである、若し間は一年を相當永いやうに思ふけれども、年を取るほど一年が短くなつて來る、暑中休暇が終つてモウ秋になつたかと思つて、まご／＼して居ると冬になつた、さうして正月が來た、春になつた、又暑中休暇だといふやうな譯で追懸けられるやうになつて來る。そこでモウ三十歳以上になつて世の中



で仕事でもしようといふ者は、つまらない所に時間を費して居つては碌な事は出来ない。無駄な事をやつて、後から考へて見ると、あんな事をやらなければ宜かつた、大して悪い事でもないけれども、つまらない事に多くの時間を徒費してしまつたといふことを後悔する人が割合に多いのである。又その中には或は悪い事に無駄な時間を費すことも相當にある譯である。同じ善い事の中でも能くその軽重を考へて、これは力を入れんならぬといふ所に力を入れて行かなければならぬ。斯ういふ所に説教を聴きに來る人でも、碁を打ちに行く事もあり、謠曲を習ひに行く時もある、説教も善いことだ、碁も善いことだ、謠曲も善いことだ、併し今日は碁の友達が來る、説教も何道も聴いて見るけれども大抵同じやうなことで、それは吾輩は略々得たりといふ譯である、碁の方は局面が轉換してなか／＼面白いから……といふので、信心はやめないけれども、日曜には碁會所

の方へ行くといふやうなことがある。それはやはり善い選別方が間違つて居ると言はなければならぬ。人間の行爲の價値を批判して、さうして最も價値の多きものを執つて、それに力強く進んで行くのを精進行といふのである。斯ういふ善い言葉は他には無い、世間で使つて居る言葉では、勇往邁進といふやうなことはあるけれども、それはたゞ元氣良く行くといふだけで、喧嘩に行くのでも勇往邁進である、料理屋に行くのでも勇往邁進である。たゞ勢ひ良く行くといふだけであつて、そこに輕重を選別けるといふ意味が無い。この選別るといふことが最も大切な事ナンである、たゞ進むばかり進んだつて、選別がうまく行かなければ駄目である。

その價値を選別けてそれに力強く進むといふことが、人間行爲の上に於て非常に大事なことだ、これは毘梨耶波羅蜜と言つて六波羅蜜の一つではあるけれども、考へ方に依つては、六波羅蜜の中で一番大

事だと言はれて居る。一心精進と言つて、心に力強く決意して進んで行く意思の剛健、仕事の完成といふことが人間になれば、どんな善い事があつてもそれは役に立たないのである。

去る九月一日は大震災の満四週年記念であつて、その記念の教化運動として吾々教化團體の方でも、どういふ標語を定めて國民に警告したら宜いであらうかといふことで、屢々協議を重ねた結果「震災よりも恐しい心のゆるみ」といふ語が先づ宜しいといふことになつて、九月一日の東京市の電車の乗換切符百六十萬枚、横濱市の電車の乗換切符十五萬枚の裏面にそれを印刷し、それから十萬ほどの小冊子にその意味合を記して市民に施本をし、千枚の辻張を市内の要所に貼出し、七八箇所に講演會を開いてその運動をやつたのであるが、この「心のゆるみ」といふことは、即ち今申す精進の反對で、心が弛緩した懶惰懈怠の精神を言ふのである。

それは震災のことから考へて、日本の現状に就てこの標語を選んだのであるが、併し事は同じことで、日本に於ける彼の大震災の如きは非常な重大な事件であるから、それに就て考出したことは、大抵の場合にやはり當嵌まるのである。彼の大震災は人命を奪ふこと九萬一千三百三十四人、財を失ふこと百億一千萬圓、さうしてその影響が今日に及んで銀行の破綻なども生じたといふ譯で、經濟界に於ては今猶ほその創傷は癒えて居らない。隨つて各方面の商工業者の上にも多大な影響を與へて居る、まだこの災害の打撃といふものは除かれて居ないのである。併しその災害は實に恐しいことであつたけれども、人々の心さへ確かりして居つたならば、その災害を却つて幸福に轉することが出来るのである。

人間といふものは、古來えらい人の傳記を讀んで見ると、子供の時分から無事に成長した人は一人も無い、必ずやその成人して行く間に、様々なる艱難



辛苦迫害曲折といふものに依つて非常な苦を受けて居る、それを通過して行く間に人格が完成して居るのである。東西古今の偉人傑士、高僧達人といふやうな人に、生れてからボンヤリ大きくなつてえらくなつた者は一人も無い、必ず相當なる苦節を経て、それからえらい者になつたのである。

國に於てもやはりその通りであつて、何等その國が困難を経ずして、天恵にめぐまれて居る、土地も廣いし、農作物も出来る、水産も獲れる、山から木材も出て来る、遊んで居つても大丈夫だといふやうな國の遊惰の民といふものは、必ずや他から侵略をされて、何の鍛錬も経て居らぬ、知識に於ても勇氣に於ても、武力に於ても劣つて居るから、僅かな力に依つて征服されて、所謂從屬の民、奴隸の民とならなければならぬ。却つて左様に他國を侵略、征服するやうな國民は、寒くて食ふ物も無いといふやうな所から出て来て、さうしてさういふ天恵の民を壓迫

して居るのである。

社會でも國家でも、一軒の家でも、あまりに恵まれてばかり居れば餘な事は無い、金持の家が三代は續かぬといふ諺があるが、今でもその原則は同じことである。祖父は貧乏な家に生れて、一生懸命骨を折つて産を興した、その息子は親父のやかましい轢を受けて居るから、半分は確かりした所があるが、半分はモウいけない、孫になるといふとモウまるで腐つて居るから、三代目には大抵資産を蕩盡してしまふ。その三代目の孫といふものは生れてから何の困難も經ずして、非常な幸福に恵まれた生活を以て大きくなつた者である。國家社會も、家庭も個人も理由は同じものである。

それであるから災難といふものは必ずしも憂ふるには足らない、日蓮聖人の仰せられる所に依れば「大なる福は大なる禍より起りて候」大いに國家が發展するとか、大きな人間が出来るとかいふことは、必

力が無いと言つて、そこまで行かなければ本氣にならぬといふやうな諺のもので、モウ少し早く氣が附けば恢復するのに、惜しいことに手後れだといつて醫者も匙を投げるやうになる。經濟でもやはりさういふ關係がある、少し早く氣が附きさへすれば恢復力は十分にあつただけれども、全く手後れである、今や日本は將にその手後れにならんとしつゝあるところである。

この眞理を味ふ時には、大正十二年の大震災などは決して徒に嘆くことはない、既に出来た以上はこの災難を善用して、禍を轉じて福とするといふ覺悟を以て行かなければならなかつた。ところが不幸にしてそれがさう行かなかつたのである、震災直後二三箇月は大分痛感えたやうであつたけれども、その後復興の爲め一時の景氣が出た、バラツクを建てるにも坪百二十圓、百三十圓といふやうなことになる、その他あらゆる方面に人手が足らなくて、勞働者は一日に七圓も十圓も儲かるといふ譯であるから、それが爲に又人心が糜爛してしまつて、爾後良い工合に引續まらないで今日に及んだのである。今日は財界の混亂等から不景氣はいよ／＼深刻になつて来て、少し國民も覺醒しかけたやうである。併しこれは病人と同じもので、モウ氣が附いた時分には恢復

この危機を救ふ道は他には無い、たゞ國民の經濟に關しての自覺、所謂勤勞の精神といふものをどうしても喚起さなければならぬ。それには先づ勤勞といふことが一番必要である、儉約も無論大事だけれども、儉約ばかりしても働かなければ駄目である、働くことが一番大事ナンである、働かさへすれば儉約も自然に出来るやうになる、働いて金銭を儲けるといふと、その金銭の味ひが能くわかつて来るから無暗に使はなくなる。總ての日本人がモツと働くと



いふことに歸らなければいかぬ。

ところが徳川時代の永い間の習慣からして、日本人には兎角働かない人がえらいのだといふ頭腦がまだ半分残つて居る、支那や朝鮮には今日でもさういふ風が盛んにある。何にもしないで立派に食つて行くといふ人は非常にえらいやうに思つて居る、女の人でも何にもしないで、私はモウ朝起きれば顔を洗つて、御飯を食べて、風呂に入つてお化粧をすれば、何にも用がありません」といふやうなことを得意然と誇つて居る。さうして世間の者も、何にも用が無いといふ人は非常なえらい人だと思つて居る、何か仕事があるといふ人は生活に逐はれて居るので、それはまだ低い人だ、斯ういふ風に考へられて居る。男でもやはりさういふ傾向が多少あるが、お婆さんなどになれば殆どそれである、「イヤ、モウ私は嫁も來ましたし、息子も確かりして居りますから何にも用事がありません」といふことを以て非常に名譽と

考へて居る。さういふ氣分は是非とも直さなければいかぬ。

愛知縣の碧海郡に新川といふ所があつて、私はこの夏講演に行つたが、その地方は四箇村で國民商業學校といふ學校を経営して居る。普通の農村であれば小學校の經費すらもなか／＼困難を感じて居るのに、小學校の外に私設の商業學校を農村四箇村で共同經營をして居つて、校舎の建築費に十六萬圓掛つた、一年の經費が一萬八千圓掛るといふ、それだけを四箇村の農民が一般教育費の外に負擔して居るのである、實にえらいものである。さうしてそんな風に行けるかといふと、その農村ではお爺さんでもお婆さんでも、朝起きて御飯を食へたら皆な働く、尤もその地方は三河といふ夏の産地であつて、爺さんでも婆さんでも土を担ねてトン／＼叩けば皆なそれが金銭になるといふやうな譯である。近來は土管といふものが、道路工事やナニかに澤山使はれる、

大きな土管、小さな土管、それ等を拵へて居る。又その他に養鶏をやつて居るが、その組織などでも實に大きなもので、まるで紡織會社のやうな大組織の建造物の中で養鶏をやつて居る。その地方民の勤勉の結果に依つて、農村でありながら四箇村で商業學校を経営し、年に一萬八千圓の經費を四箇村で負擔するといふことはなか／＼えらいことであるが、それを平氣でやつて居るといふことは、人間は勤勉努力すれば餘程えらい力が出て來るものであるといふことは、この一事を見てもわかると思ふ。たゞ弱つた／＼と言つてしまへばそれ迄であるが、ナニ一つやつて逃げようといふことになれば、人間は相當大きな仕事が出来る譯である。

左様な譯で日本の今日の生活問題などでも、心のゆるみを引締めて、國民全体が所謂精進して掛るといふことにならなければならぬと思ふ。

それは決して經濟の方面ばかりではない、社會の

いろ／＼の事柄も皆なそれに影響して來る、人心のだからしない、所謂浮華放縱といふやうなことも、風紀の頹廢といふやうなことも、又政治上のいろいろの混雜といふやうなことも、それから思想の惡化といふやうなことも、これ皆な心のゆるみから起つて來るのである。モツと眞劍に考へたならば、人間がさうフワ／＼して、モダン・ガールだとかモダン・ボーイだとかいふやうなことをやつて居ることは出來ない譯である、彼等はどんな意思でやつて居るのか知らぬが、洋服をブカ／＼に着て、變な嗜好をしてステツキを振廻して居る、自分自らも辱かしいやうな氣がするだらうと思ふのであるが、心が弛んで居るから、あゝいふブカ／＼の洋服を平氣で着て居られるのである。人間の心のゆるみである。所謂放縱である、やりたい放題でだらしが無いからあゝいふものが出来る。心を引締めてシヤンとすれば、あんな事は出來ない。



政治上の事でも、政争がどうもだらしが無いやうに思はれる。選挙のことも、選挙民がちやんと考へさへすれば、誰を議員にしたら宜いかといふことは直ぐわかる譯である。それを壁に候補者の名前を貼付ける、一枚でいけば二枚貼るとか三枚貼るとかすることは宜いけれども、二十枚も三十枚も、壁の見えなくなるほどベタ／＼貼廻すやうなことをする、だらしないこと夥しい。アンナに澤山貼らなければ覺えて呉れないやうな名前ならば、最初から候補者にならぬ方が宜い、實に見つともないことである。そんなにしてどうぞ入れて呉れ、どうぞ頼むと言はなければ當選しないとするならば、その人は明かにそれだけの興望が無いのである、宜い加減のところを諦めて豆腐屋にでもなつた方が宜いだらう。どうもあゝいふことでも、だらしが無さ過ぎる、ものには程度があらうと思ふ。

思想の悪化でもやはりさういふ傾向がある、その宗教のこともやはり同じやうな關係を有つもので、大体佛教各宗派の坊さんでも信者でも、だらしがなさ過ぎる譯である、モウ少し氣を付けて心を引締めたら、こんなものだらうと思ふ。それは弛むといふことも人間には免れ難いことだけれども、あまり弛み方が激しい。弓にしても弦が弛んで居るといふこともあるし、人力車のタイヤも空氣が抜けて居るといふこともあるけれども、併し人を乗せて走る以上は、如何にタイヤの空氣が抜けて居つても、いくらかは入つて居なければならぬ。どんなに弛んだ弦だからと言つても、大弓屋で錢を取つて弓を引かせる以上は、矢が的まで届かなければならぬ、それをまるつ切り弦が弛んでしまつて、矢の番へることも出来なない、それでもやはり弓でござるといふやうなことは、あまりにだらしが無さ過ぎる。客の方も大弓場に行つたけれども、弓は忘れてしまつて、彼處の家は上手に茶を飲ませるから結構だと言つて、毎日出掛け

事を本當に眞剣に研究して、それが間違ひながらもどうしても斯ういふ條理のものだといふことになれば、マア間違つては居るけれども、その思想研究の熱心なる態度は又これを正しい方向に導くことも出来るけれども、たゞ上調子に少ばかりの雜語を見たり、小理窟を覺えてえら、さうなことを言つて居る、「ナーニ思想上の議論などは聽かなくてもわかつて居る、今日はたゞ爆裂彈あるのみちや」ナンと言つて、その大言壯語を聴くと非常に熱があつて元氣があるやうだけれども、實はその言ひ居ることがやはり上調子のものである。酔ばらつて居るやうに思はれる、本當の引締つた精神から來て居るものではない。

斯様にして經濟問題も、人心の頹廢も、思想の悪化も、政治の墮落も皆な根本は一つである、心に引締める所があれば、隨つて常態に復して行くといふ譯である。

弓は一遍も引かぬといふやうなことになるけれども、東京の寺院へ行つて御覽なさい、抑々寺は佛法の話をすべき所だけれども、三年行つても十年経つても、檀徒や信徒が集まつて嘗て一言だも如來の御教に關して語り聴くといふことが無いといふ寺が一パイである、餘りにだらしが無いではないか、モウ少し引締めなければいかぬ。

大体日本人は、事の無い時には割合にだらしのない國民である、心の弛んだやうな國民であるが、さて事が起つた、一旦緩急あれば引締まるといふ所に、日本民族の特色がある。これが緩急あれども引締まらぬといふことになればモウ日本は身代限りになる。そこでいつも引締まつて居るといふことは、先祖代々出来なない國民かも知れない、大石良雄のやうな人でも、やはり「由良さんこちら」といふやうな譯で、眼隠をして女と隠れんぼをするやうな事をやつたといふ、これはマア敵の眼を眩ます爲にやつたのであ



るけれども、そればかりではない、家で寝て居るよりもその方が面白いといふこともあつたかも知れない。さういふ所が日本人にはあるけれども、その奥にいよ／＼一大事といふ時になれば、一時のさういふ弛んだ気分を捨て、凜然として義に赴き、節に起つ所が日本人のえらい所である。

ところで今日はどうであるか、宗教のことも經濟のことも、思想のことも政治のことも、實に發奮興起して起つべきの時である。即ち國民精神作興詔書の煥發せられたのはそれである、精神作興といふことは心のゆるみを引締めることである、あの詔書には「國民精神を涵養振作し」とか「振作更張の時なり」とか仰せられて、皆この精神のゆるみを引締めること一つが國家を救ふ所以だといふ御教訓である。

ところが不思議なことには、法華經といふお経は最初からさういふことで出来て居る、ナニかにつけは汝は是なり、その時ののらくら坊主といふのはお前である、その時に精進なりし者は我である。その日月燈明佛が將に涅槃せんとする時に斯ういふことをお説きになつた。

佛是の法華を説き 衆をして歡喜せしめ已る  
日月燈明佛は法華經をお説きになつて、大勢の者は皆な喜んでそれを聴き已つた、さうしてモウ説くべき法は説き已つて、用事が無いから涅槃に入るといふことに就て、最後の別れの教があつたのである。

諸法實相の義 已に汝等が爲めに説きぬ  
諸法實相といふ本當の佛敎の眞理、絶對の教は説き已つた、モウ説くことは何も無い。

我今中夜に於て 當に涅槃に入るべし  
仍つて自分は今夜夜中に涅槃に入らうと思ふが、それに就てモウ一言だけ言うて置きたい事がある、それは

汝一心に精進して 當に放逸を離るべし

て法華經といふものは、だん／＼研究して見ると結構な教であるといふことがわかる。

法華經の序品に賓主問答といつて、文珠と彌勒の問答がある。それは釋迦如來が無量義經を説き已つて三昧に入つて、眉間白毫相の光を放つて東の方を照らされて、默然として坐して居られる、その美しき光景に於て、一座の大衆がどうした譯であらうといふことを不思議に思つた。その疑惑を代表して彌勒菩薩が尋ねた時に、文珠菩薩が言ふには、これは嘗つて日月燈明佛の時に佛が法華經を説かんとて三昧に入りたまひし光景がこの通りであつた、それにと就て話すことがあるが、彌勒よ、汝はその時自分と同じやうに佛道修行をやつたものである、けれどもお前は精進の心を失ひ、懶怠懈惰の爲に甚だ不名譽な「求名」所謂虚名を求めるところの墮落坊主といふ名を附けられて居たのであると言つて、非常に彌勒がやられて居る、彼の佛の滅度の後懈怠なりし者

即ち一心精進といふことである、緩ひどれ程善い教があり、立派な道があつたところが、その教を學びその道を傳ふる人が懶惰懈怠であつたならば、その教その道といふものは何にもならぬ、法華經ありと雖も一心精進の心が伴はなければ役に立たない、この事を忘れるなど言つて日月燈明佛が涅槃に入り給うた。然るに彌勒よ、汝はその最後の遺訓を忘れて、虚名の爲に懈怠懈惰の生活を遂げた墮落坊主であつたといふやうなことを、彌勒と文珠が問答して居る。これが芝居で言ふと、ちようど幕が開いたけれどもまだモウ一つ黒幕が降りて居つて、そこに二人の人間が懸掛けて居つていろ／＼世間話のやうなことを話合ふ、あの序幕の中の序幕となつて居るものである。

佛様が坐つて三昧に入つてござる、白毫の光が輝いて居るところに、文珠と彌勒の二人の菩薩が、懈怠懈惰なりし者は汝である、精進なりし者は今の文



珠であるといふやうに、精選の坊さんと懈怠の坊さんの話をして居る、これが法華經の序幕の骨子であるといふことを見れば、法華經の内容がやはりその如くに、縦ひ法華經ありと雖も懈怠懶惰ならば役に立たぬといふことを以て貰いて行くといふことを表して居るのである。

そこで法華經の中に人つてこれを見ると、その事に就て澤山のお話が出て居る。法華經の受持宣傳に關して最も大切な示教のあるのは第十番目の法師品であるが、そこには斯ういふことを説かれて居る。彼の有名な衣座室の三軌といふことを説いて、在家の男でも女でも、法華經を読み弘めようといふ考の者は、如來の室に入り、如來の衣を着、如來の座に坐して面して後に説かなければならぬ、如來の室は一切衆生が有つて居る慈悲の心であり、如來の衣とは同じく人々の有つて居る柔和忍辱の心であり、如來の座とは人々の有つて居る公平無私なる執はれざ

る精神である、この慈悲の心と忍辱の心と公平の心を以て説かなければならぬが、併しそこにモウ一つ大事なものがあつて、唯だ慈悲心と忍辱の心と公平の心だけで役には立たない。

是の(三軌)中に安住して然して後に不懈怠の心を以て廣く是の法華を説くべし。

この不懈怠の心といふものが最も大切である、不懈怠といふのは即ち精選のことであつて、懈け怠ることをしてしないといふのである、懈けない怠らないといふ精選勤勉の精神を貰いて法華經は説かなければならぬ。法華の宣傳者はのらくらではいかぬ、法華を信する者もやはり同じ事である、たゞ説教する者だけが熱心で宜いといふ譯は無、信者もやはり緊張味がどこまでも伴うと居らなければならぬ、であるから法師品の偈の方には、

諸の懈怠を捨てんと欲せば應當に此の經を聽くべし。

とあつて、のらくらをやめて精選の行に起たう、心のゆるみを引締めて確かりした精神で世に起たうと考へる人は、法華經を聽聞するが宜いと説かれて居る。即ちのらくら者は法華經に來るなといふのである、懈怠の者は法華の門前から斷はられて居る譯である、これは餘程お互が注意しなければならぬことである。

その次の寶塔品に至つては、暫くでもこの法華經を持つ者はそれが即ち精選であるといふことを示教になつて居る、

此の經は持ち難し 若し暫くも持つ者は  
是れ則ち勇猛なり 是れ則ち精選なり

とある、茲が大事な所である、法華の信心をちよつとでもする者は、それが直ぐ勇猛であり精選であるといふことは、前に申す信仰の性質に非常な強い勇氣と、さうして活躍する精神があるからして、是則勇猛、是則精選といふことが出て來るのである、唯

だ坐睡をして居るやうな聲を出して題目を唱へて居る、是れ則ち坐睡なり、是れ則ち懈怠なりといふやうなことに、強いて價值を附けて是則勇猛は則精選と讀め上げて見たところが駄目である。簡單な信仰のやうでも、法華の信仰はその信仰則ち勇猛であり精選であるといふのは、その信仰の内容にさういふ力を包んで、それが後に活躍を始めるから、そこで暫くでも法華經を持つたならば、その持つ精神の中から直ぐ大活躍を産出すといふことを意味して、勇猛である、精選であるといふことが言はれるのである。

尙ほこれと同じ意味に於て藥王品には、藥王菩薩が法華經の爲に信仰を捧げて、身を棄て、道に盡されるといふ場合に、

是れ眞の精選なり

といふ言葉がある、眞の精選といふことは、正義の爲には命まで差出しても悔まぬといふ所に至れば、



それが精進波羅蜜の完成を意味して居るのである。斯様に考へると法華經の到る處に、「我れ身命を愛せずして但だ無上道を信む」と言ひ、或は「佛を見たてまつらんと欲して自ら身命を惜まず」と説かれて居る。命を惜まぬといふことはたゞ命を捨てる、心中をするといふことではない、即ち勇猛精進に、最後命を捨てるといふところまで、法華行者といふものは元氣強く、善良なる行爲の爲には突撃をするといふ勇氣を有つといふことである。「身は輕し法は重し、」身を殺して法を弘めるとか、或は道に盡すとかいふ、その心の裏は即ち眞の精進といふことを意味して居るのである、ボカンとして居つて唯いきなり命を捨てるといふのではない、命を捨てるといふ所まで行くには、その中間に多大なる精進といふものが行はれる譯である。命まで捨てようと思つたら、雨が降るの、着物が汚れるのといふことはまだ大分距離がある、どうも道が遠くて弱つたとか、暑くて

堪まらなかつたとかいふ位のことには、身命を惜まぬといふ最後の終點に達するまでには、相當距離のあることである。

であるから、藥王菩薩が身命を擲つて法に盡したことを「是れ則ち眞の精進なり」と言はれたことから立歸つて考へれば、法華行者が口辯のやうに言ふ不惜身命といふことも、さう命ばかりボン／＼捨てゝ呉れても困る。理由も無く首を吊つたりナニかされては困る。その身命まで惜まぬ力を引伸して、平素の善良なる行爲の上には是則精進、是則勇猛といふことに現れて行くべきものだと思ふのである。

人が一たびさういふ決心をすると、人の力は強いものであり、恐しいものである、一人の力と雖も非常に大きな仕事が出来ものである、一人ぐらゐの力では何も出来まいと思ふけれども、併し結局は一人の力である。日露戦争の如きは双方國力を擧げて戦つた、國民全体の力を盡したといふけれども、併

し考へやうに依つては、その勝敗の岐るゝところは一人の力である。大きい所で言へば、若しもあの場合に、艦隊を動かして居る司令官がちよつと態度を誤れば、それが爲に對馬の海戦もどうなつたかわからぬといふ譯である。或は奉天の陸戦でも、その部隊長がちよつと或る行動を誤まれば、逆襲を受けてどういふことになつたかわからぬので、戦の勝敗といふことは、實に一人の司令官が是則勇猛、是則精進の心であつたか、是則懈怠、是則臆病の心であつたかといふことに依つて、國家の興廢も岐れる譯である。一人の隊長がタヂ／＼とすれば、多くの兵隊がやはり臆病になる譯であらうと思ふ。それはナニも大將ばかりではない、イザ突貫といふ場合でも、「進めッ」といふ號令が出たのに兵隊が逡巡して、「お前先行け」「イヤお前が先行け」と言つて居つたら、全体の士氣が弛んでしまふ、その中に一人の先んずる者があれば、皆その一人に倣つて突撃す

る譯である。非常に大きな事のやうでも、最後は一人の力である、戦は最後の五分間といふことは、時間的に言ふからであるが、これを人的に言へば、勝敗は最後の一人の力である。人生の事一切萬事さういふ譯のものである、「こんなに大勢やつて居るのだから自分一人ぐらゐは傾けても宜からう」といふ考へは非常に悪いことである、一人の力天下を制するものなりといふことに於て、人間は一切を考へて行かなければならぬ。

日蓮聖人の如きは、その意味に於て實に模範的の偉人である。「日蓮は日本の柱なり」と言ひ、「日蓮を倒す時日本の國は無いぞ」とまで彼は豪語した、これは徒に慢心で言ふのではない、自分が日本を背負つて立つといふ、眞の愛國の赤誠があつたから、「我れ日本の柱とならん」と言ひ、後には「我れ日本の柱なり」とまで言つて、彼の松葉ヶ谷の庵室を襲うて龍の口に曳出す時に、召捕に來た武士共に對して「日



蓮は日本國の棟梁なり、日蓮を失ふ者は日本國の棟梁を倒す者なり」と大聲疾呼したと彼は自ら書いて居る。

それは日蓮聖人だけが言ふ言葉ではない、苟も法華經を奉ずる者は、皆はさう行かなければならぬ、最初はマア大きな聲で言へなければ、小さな聲で少し積古をして見るといふだけでも、非常な效能がある。團扇太鼓などを叩いて下手な題目をやるよりも、「我は日本國の柱はり」といふことを、女房だけでも捉へて言うて見るが宜い、「へい左様でござるか、日本國の柱ともあらう人がさうのらくらして居ては危ぶないこととござる」といふやうなことになるだらう。そこに大いに反省しなければならぬ。最後は一人の力が國家を支配し、天下を左右するといふ信念、それがやはり精進波羅蜜の眞髓である。

であるから精進波羅蜜の例には、古來能く引出されるのが、蜆の貝を以て大海の水を掻干し得るや否や

ばならぬ、たゞ法衣の袖に手を隠して顔へて居るやうな坊主が澤山になつたといふことは大間違ひである。それから能施太子は一生懸命にやり出した、すると諸天善神がこれを見て、彼が貧乏な者を助けようといふことは結構なことだ、大体龍宮城の者は贅澤ばかりして、淫靡爛熟の生活をして居る、彼等は時々膺懲するが宜からうといふことになつて、諸天善神がこれに参加して助勢をすることになつた。そこで神道の力を以て大海の中に飛込んで、大海の水を腹一ぱいグーッと吸込んで、これは神通の力だからどの位入るかわからぬ、さうして他の世界へドーッと漚の如くにふきあける、諸天善神が無数にやつて来て、海に飛込んでこれをやつたので、見て居る中に大海の水が減つて来て、龍宮城の屋根が見えるやうになつた。龍神は驚いて妥協を申込んで来た、「これ／＼の寶を差出からごうかあとは勘辨して呉れ」

といふ問題がいつも出て来る。能施太子といふ方が菩薩行の時分に、布施の行をだん／＼やつて行つたが、自分の財が盡き終つた、そこで龍宮城にはいろ／＼寶があるといふから、それを得て憐れな人間を救ひたいといふので、大海の水を掻干して龍宮城の寶を得ようといふことになつた。「大海の水はなかなか多い、併し我が志大なれば必ず掻干し切れぬといふことはあるまい」と言つた、ところが龍神が現れて「それは逆も駄目です、あなたが蜆の貝を以て大海を掻干すならば、あなたの手が折れてしまひ、あなたの命が無くなつても到底出来るものではありませぬ」と言つて笑つた。「イヤ、そんなことはない、私の精進の力、必ず掻干して見せるから、その時泣面をかくな」と言つて、太子は少しも怯まなかつた。それはお伽噺のやうな意味であるけれども、併しそこに佛教の大精神を現して居るので、非常に佛教は剛健な、偉大なものであるといふことを知らなければ

と言つたけれども、太子は聽かない、「お前が最初に笑つた罪に對して全部の寶を出せ」といふので、遂に海の水は掻干し切られて、龍宮城の寶を悉く持歸つて施したといふことがある。

これは今言ふ通りお伽噺のやうであるけれども、併し斯様な説話といふものは、その外側は取つて捨つべきであるが、その中に織込まれて居る精神といふものは萬代不易のものである、蜆の貝を以て大海をも掻干し得るといふこの精進力は、實に偉大なものである。(續)



# 菩薩行に就て

本多日生

次に菩薩行の方便に關してお話をしようと思ふ。これは大薩造經に詳しく佛が菩薩行の方便といふことを説かれたのであるが、文殊師利菩薩がそれに關していろ／＼お尋ね申上げて居る、その話が濟んでから大薩造と嚴熾王といふ王様とが、實際問題の上から菩薩行の應用を具体化して話されて居る、その點が非常に明瞭になつて居る。大体このお経は、佛が菩薩行の方便の境界を説かれるといふことであつた、それが爲に文殊師利菩薩なども非常に喜んで、菩薩行が偏つてしまつたり、迂遠な方に行つてしまつたり、超世間的になつてしまつたりして、菩薩といふものが間拔菩薩、氣拔菩薩になつてはいかぬといふことが大きな問題であるから、そこで菩薩行を實際

人生の上に活躍せしむるお話だといふので、非常に喜んで、文殊師利が申上げるには、此處に集つて居る者は皆な立派な人達でありますから、どうぞ佛様は隠す所無く、遠慮なく菩薩行に關して實際運用のことを話して戴きたいといふことを申上げて居るのである。

そこでお釋迦様が説かれた菩薩行方便の原則は斯ういふ事である。

善男子よ、菩薩は應に方便波羅蜜を修すべし、方便とは一處寂靜の境界を離れずして世間憒鬧の境界を現じ、一切聖人の境界を離れずして世間凡夫の境界を現じ、能く出世間の境界を離れずして世間諸有の境界に住し、菩薩實際の境界

を離れずして聲聞緣覺の境界を現す。

菩薩は方便波羅蜜といふことを大事にしなければならぬ、その菩薩行を實際に應用するにはどういふ心得が必要であるかと言へば、一處寂靜の境界と言つて、一つの處に眞のさとりに達した大精神を有つては居るけれども、その高い大きな精神に留まつて居つてはいかぬ、その寂靜な高い精神が、實際の價値といふやかましい人生の複雑な中に出てはたらかなければならぬ。憒鬧といふのは淺草公園のやうに非常に人が雜鬧してガチャ／＼やつて居る所といふことである、菩薩行は山の上に登つて眞如の月を觀ずらんと言つて、寂靜な所に汽笛の音も聞えないといふやうな所でやつて居ることではない、世間雜鬧の巷に出て菩薩の活動をしなければいかぬ。志す所は寂靜の境界であり、聖者哲人の境界であるけれども、聖者哲人を慕ふだけでは駄目である、その慕つた人の精神を實際社會に下して、世間凡夫の境界

に酔うて居る人達を救うて行く爲にはたらかなければならぬ。出世間の境界、即ち佛道修行の淨き高き所に居つて、そこから世間のあらゆる事柄に眼を配つてそれ等を護り救ふといふことにはたらくのである。菩薩はお寺の中に居れば宜い、高い山の上に居れば宜いといふ譯のものではない、世間の諸有の境界と言つて、政治であらうが、産業であらうが、社會の構成されて居るあらゆる仕事の中に入り込んで、その境界に住すといふのであるから、坊さんになつて居るばかりではない、銀行業者になつて居る者もあれば、役人になつて居る者もある、教員になつて居る者もあり、労働者になつて働く者もある、世間のあらゆる境界に住して、その生活の中に菩薩の力用を出現して行かなければならぬ。であるから菩薩實際の境界を離れずして又低き聲聞緣覺の境界を現することもある、それは唯だ高い所ばかり話してもいかぬ、聲聞緣覺の境界といふのは、實際人生の悲



観すべき事柄を能く知り、頼りなき事をも能く知つて、さうして人の世を導かなければ、「俺は人が死なうが世の中が變動しようが、そんな事には驚かない」と言つて、さういふ自分の定まつた精神だけで人生に處してはいかぬ。自分は火事に出會はうがどんな變動に出會はうが驚かないけれども、社會の人達は僅かの變動に出會つても悶え苦んで居るのであるから、これを救ひ導いてやらなければならぬといふ點に菩薩の力用があるのである。そこで釋迦如來はその意味を更に偈を説いて述べられた。

身口意常に

第一義寂靜に住すれども

衆生を利益せんが爲に

方便して世間に同す

菩薩といふものは何時も第一義寂靜といふ、最も高い寂靜なさとの所に上つて居るものであるけれども、併し世の人々を救ふが爲には方便して世間に

ふ、實世間の救済が忘れられた宗教となつてしまふのである。

これが根本の眞理で、これだけ言へばモウ宜い譯である、さう澤山の事を言はなくても、これを敷衍すれば皆なこの中に含まれて居る譯であるが、それから出ていろ／＼の教に關して文殊師利が話を進めた。佛法の中にも様々に教は分れて居るやうであるし、世間の教もいろ／＼あるやうであるが、それは皆な一つ／＼別々に役立つものかといふことを聽いた時に、菩薩行の原則はその點を明にして置かなければならぬ、教が小さく分れて居るのはそれは部分を見るからである、ズツと全体を見通せば、川はいろ／＼に岐れて居つても、海に入つて一つの水となる、同一鹹味と言つて鹽辛い一つの水となる、いろ／＼の鳥が色が違つて居つても須彌山に近づけば皆な同じ金色になるといふが如くに、佛法の内の教でも外の教でも、我がこの大乘の眞實の教に來れば、

同すで、方便といふのは最も適當したる方法を研究して世間に應同して、世間と合致するやうな力用をして行かなければならぬ。菩薩行をやる者は迂遠であつてはならぬ、社會と没交渉ではいかぬ、この人生社會に接觸を取つて力用を顯して行かなければならぬ。その時代その處の必要を能く見て社會に救済を與へて行かなければならぬ。宗教はさうしてさうなければならぬものであるが、その意味を明かに言ひ表はし得たところのこの法華部のお經といふものは、實に尊といものである。これが「皆順正法」の法華の精神を敷衍して居るものである。他の阿彌陀經であるとか、般若經であるとかいふものはさう行かない、色即是空、空々寂々といふやうな事になつたり、或はこの世の中はさうでも宜い、死んだら阿彌陀様が助けて呉れる、早く來い／＼と手招きをして居るといふやうなことになるものであるから、この衆生を利益せんが爲に方便して世間に同すとい

それ等の教は皆な疏通せられて、一つの大きな教の中に合体するものである。それが法華經の皆順正法といふことであつて、經文には俗間經書と言つて、世間の經書等を擧げてあるが、佛法の教も世間の道徳に關するやうな教も皆な一致する譯である。それを「佛法の一橋梁の度」と説かれて、途中までいろ／＼の道がある。

分けのばるふもとの道は多けれど

おなじ高根の月をながむる

といふ歌がある、この歌の意味なども能く了解されて居らない、「何處から行つても同じことぢや」……斯ういふ意味に考へたのが非常な間違ひである、登る道は何處から行つても途中の話であつて、同じ山の頂上に達してその頂上から月を眺めなければならぬ、その山の頂きとさうして月、それを除いては何故に麓にまごついて居るかわからぬといふので、即ちこの歌の意味は統一を教へて居るものである。そ



の統一が非常に大事なので、今この大薩造經にも、途中の道は幾らもあるけれども、しまひには大きな佛法の一つの橋にかゝつて來るといふことを説いてある。例へば日本全國の各府縣知事が會議の爲に上京してさうして、天皇陛下に拜謁を許されるといふことになる、さうすると關西地方の者は横濱を経て、東京驛に降りるし、千葉縣の知事は兩國驛に着くし、東北地方から來た知事は上野の驛に着く、山梨縣の知事は飯田町に着くといふやうな譯で、道はそれぞれ違つて居る、それから自動車に乗つて行く者もあり人力車に乗る者もあり、いろ／＼違ふが、いよいよこれから天皇陛下に拜謁をするといふ時には、どうしても二重橋を渡らなければならぬ、そこで全國の府縣知事が皆な二重橋に集つて來る。ちようごさういふ意味で、その二重橋が佛法である、そこへ來ればどうしても二重橋を通過せすしては陛下にお眼に懸かれぬといふやうな意味合を茲に説かれて居る

のである。それが唯だ譬ではない、人間なら人間といふ問題に就いても、いよ／＼大事な信心の所に行けばどうしても佛法に依らなければならぬ、例へば人の性は善なりといふことを孟子が言つて居る、その善といふこともだん／＼突詰めて行くと、いよ／＼最後の決定をするまでにはやはり佛法の佛性論の話を聴かないと、人間の眞實がわからない。又佛様の話に就ても、阿彌陀様とか大日如來とかいふやうに、いろ／＼澤山の佛がお經にもある、他の宗教にもいろ／＼の神を説いてあるけれども、それは途中までの話であつて、本當の實在の超人者といふものゝ磨きをかける所に行くと、やはり佛法の眞實に達しなければならぬのである。その通りの譯であるから、途中の所に於て何も争ふことはないけれども、最後は佛法の大きな橋を渡らなければならぬといふことを心得ねばならぬ。それが統一であつて非常に大事

な着眼である。途中や入口で喧嘩をして、關西から來る人間を東北の人間と同じやうに上野驛で降ろさうとしたりするから面倒な喧嘩が起る、それは上野驛、東京驛、兩國驛とそれ／＼違つて居るけれども、いよ／＼陛下に拜謁する場合には、どうしても二重橋を通過しなければならぬ、明日はいよ／＼二重橋をちやといふ所に佛法の統一の意義がある。その事を説かれて、最後は佛法の一橋梁——二重橋を渡らなければならぬと言はれるのである。

徳もあれば智慧もあり、辯論もあり必要なものを皆な有つて居るといふので大薩造と言ふ、智徳兼備といふやうな譯だけれども、智慧ぐらゐでないから大薩造と言ふのである。尼乾子は婆羅門の坊さんの名前であつて、佛法の沙門といふやうな意味である。その大薩造尼乾子が各地を布教をして憍闍延城といふ所にやつて來た、印度では城と言つても國と言つても同じもので、城を中心にして國があるのである。その王様の嚴熾王といふ人はなか／＼えらい人だといふことを聞いて大薩造がお眼にかゝりに行つたのである。

これまで佛と文殊菩薩の話であるが、さういふ序幕があつて、それから今度は大薩造と嚴熾王との話になるのである。大薩造は尼乾子と言つてその當時の婆羅門の服装をして居つた者である、これは非常に立派な婆羅門の學者であつて、釋迦如來に歸服をして佛敎を宣傳するやうになつても婆羅門の服を脱がなかつた、薩造は譯して有といふ字と同じことで、大はすぐれたことである、何でも有つて居る、

そこで王様に面會をした時に、いきなり立派な挨拶を申上げて居る。この挨拶の仕方が大事なのであつて、その挨拶の中に自分の腹前を示す譯である。日本ではえらい人にお眼にかゝると言つても、ただ黙つてお辭儀をして黙つて歸つてしまふから、ごの位の識見があるかわからぬ、あゝいふ變なやり方は



しない、印度のやり方は進歩して居る。いきなり初対面の挨拶の言葉で、相當自分の識見なり人格なりを表はさなければならぬことになつて居る。そこで大薩遣は王様に對して斯ういふ挨拶をした。あなたはいろ／＼功德をして居られる、それは澤山の善い事をして居られるのであるが、あなたの治めて居る國內に於ては盜賊や亡命や、又惡團結をつくつて人民に迷惑をかけるやうなものが無くなつたかどうですか、又役人に不都合な者があつて賄賂を取つたり不正な事をして人民をごま化すやうな者はありませぬか、又い／＼の間違つた思想や不正な者が現れて世間の人をだましたり迷したりする者はありませぬか、或は謀叛を起し、世の革命とか顛覆とかいふやうな事を計畫して、それが爲に人民を騒がすやうな事はありませんか、それから一般的の窃盜、空巢狙や搔拂といふやうな者はありませぬかどうですか、そんな者があるやうでは本當の善い國とは言へませぬ、斯う言つて更にそこに偽を説いた、この偽を説くといふことは可憐な挨拶であつて、王様を尊敬して言ふのである。

常に衆生を慈念して

諸の怒害を行する莫れ

王當に邪見を捨て、

正見心を堅固にすべし

あなたは常に多くの人を憐んで無理はなさらぬのであるが、併し考に間違つた所があればそれは捨て、正しい考になつて、その正しい考を益々鞏固にせられなければならぬと思ひます、あなたに悪い考へがあるとは思はぬが、若しあつたならばお捨てになつて益々立派な考をお磨きにならなければなりません」といふ意味を申して、續いて佛教に教へるところの十善業と言つて、殺生、偷盜、邪淫、妄語、綺語、惡口、兩舌、貪慾、瞋恚、愚痴といふ十惡を誡めるところの菩薩行の話を極く簡略に説明した。

これは即ち道德的説明であつて、やはり菩薩行の實際應用の出発點を話して居るのであるが、さういふ風に國內に泥棒が有るとか無いかいふやうなことをいきなり心配して挨拶にして居る。今の坊さんは到底そこまでは考へない、そんな事は警察の役目だ、こつちは葬式さへしたら宜い」と考へて居る、そこに非常な間違ひがある、菩薩行の方便が貧弱になつて來るのである。

そこで嚴熾王は大いに喜んで、遠い所から我が國民を教化すべくお出でになつて、私にまで會ひに來て下さつた、私は正しき教を聴くことほど有難い事は無いと思つて居る、あなたの今の話を聴いただけでも、私の歡喜は永らく會はなかつたやさしいお母さんに會つたやうな歡喜である、饑えて食を得たるが如き歡喜である、渴して水を得たるが如き歡喜である、裸体に衣を得たるが如き歡喜である——斯ういふ譬を幾つもズツと列べて歡喜を表はして居る、

さうして學んで師に會ふが如きは、その歡喜はこの上も無いことである、教を聴かんと思つて居る者が、善き師に廻り會ふといふことほど有難い事はない、自分は平生から考へて居るが、人が生れて正法を聴くことはなか／＼難いことである、人間に生れること既に難く、完全な人となることも難く、正しき考へを有つことも難く、信心を起すといふことも難い、善き師に出會ふといふことは最も難い、然るに今は自分はこの等の難いことを皆な免れて、面りあなたにお眼にかゝつて正しい道を求める心もあり、教を聴く耳もあり、あなたは善き師として教を與へて下さるのであるから、ちようご寶を得ようとして廣い海を渡つて寶渚に達したやうな歡喜であると言つて王様が感謝した。

それから嚴熾王が尋ねて言ふには、大休國王の力が人民を護るといふことはどんな事を言ふのでありませうかと言つた、その時に大薩遣が答へて言ふに



は、人民を護るといふことは、王様は人民の父母であつて、ちようご母親が赤ん坊を養ふやうに、若しお襟裾が濡れて居れば泣かない中に乾いたお襟裾に取換へてやるやうに、泣き出してからでは遅い、泣かない中にしてやる、その心が王様の心である。國家は人民の力に依つて成立つので人民の心が不安に陥つたならば、その國は亂れて遂に亡びてしまふ、それ故に國王たる者は人民の事を思うて、母が赤子を可愛がるやうに何時も心をはたらかさなければならぬ。その結果は自然に國內の人民の事柄に精通するやうになつて、洪水が出たとか、早魃があつたとか、風が吹いたとか、今年は米が穫れたとか穫れないとか、或は病氣が流行るとか、様々の人生に現れて来る人民の幸不幸がわかるから、それに應じて率先してその優しい精神をはたらかして行くことが人民を護るといふことである。さうして王様と言つても四通りの階級があつて、その中の一番上等な王様

は轉輪聖王といふのである、それが廣く世界を統御するので、その轉輪聖王は決して壓制暴力を以て他人の領土を奪へて行くのではない、徳を以て道を以て従へて行くのである、要する所、十善道に依つて天下を化するのである。十善道は前に言ふ殺生、偷盜、邪淫等の十惡を誦める道德的の事柄を以て、仁義敦厚の俗をつくつて世の幸福を増して行くことであるといふ話をした。

それに就て嚴熾王は轉輪聖王の心がけをいろ／＼尋ねられて居る、そこに大事なことが現れて來るのである。佛教では國家經綸に關しては轉輪聖王の理想が中心思想である、阿含より涅槃に至るまで何處まで行つても動かない、この轉輪聖王に關する思想を研究すれば、佛教の國家觀、佛教の國王觀といふものがわかるのである。それは決して武力を以て征服するのではなくして、徳を以て教化するのである、武力を廢するのではない、一面に武力を有つて居つ

て、一方に徳を以て他を化して行く、侵略をするのではない、正義を行はしめ、人道を行はしめるのである。その轉輪聖王の威力は、若し正義に反して人民を虐げたり不正を行つたりする國家があればこれを腐懲する、侵略の腐懲でなくして倫理的の腐懲を行ふ、所謂眞の正義の戦に依つて不當のものを腐懲して行くのである。

それから嚴熾王は、轉輪聖王は左様に慈悲の心の本にしてはたらくものであつたならば、國內に悪い者があつても處分することが出來ぬではないかといふことを尋ねた、大薩遮は答へて、それはさうではない、根本は慈悲から出るのであるけれども、併し國家の刑罰といふものは廢することは出來ない、たゞ刑罰を行ふには五つの事を注意しなければならぬと言つて、五つの大事な點を擧げて、ちようご今日司法問題に於てやかましく言うて居るやうな事柄を説いた、或は證據調をするとか、本人を調べる場合

に壓迫してはいかぬといふやうな點を五箇條擧げて、左様にして能く調べた上に於て、さうしても不都合な者は處分しなければならぬ。その處分の方法は死刑は廢すべきものである、その他手や足を斷るとか耳や鼻を削ぐとかいふやうな殘忍な事はいかぬ、牢獄に幽閉し手脚足枷を加へるくらの事は宜しい。

さうしてさういふものが罪の本体かと言へば、國王の思を忘れ、官吏にして政を紊るといふやうな政治上の罪惡が根本である、國家社會に禍亂の生ずる事は、政治の腐敗に原因するが故に、政治上の罪惡は最も重くこれを處分しなければならぬ、今の所謂綱紀肅正といふことが第一に擧げられて居る。第二には家庭に於て親不幸であるとか、妻子を虐待するとかいふやうな殘虐な者、その親に對する罪惡を最も強く成敗しなければならぬ。それから妻子眷族、往いて言へば今日の勞働問題のやうな所に入つて、どんな大きな商店でも事業でも、資本家の力のみで



これが出来るものではない、皆なそれは多くの人の協力で依つて利益を得るのであるから、その分配には餘程注意をして、資本家のみが利得をしないやうにしなければならぬ、それを何處までも慾張つてやる者は相當の刑罰を加へて宜しいといふことになつて居る。三千年の昔既に社會問題の中に於ては、やはり分配問題を一番大事なこととして論じて、「資生は奴婢の共報」とあつて、いろ／＼の事業に於て利益を得て來るといふことは働く者の共同の結果である。

資本も大事である、今の共產主義者の言ふやうに、勞力萬能ではない、資本横暴でも行かす勞力萬能でもないかぬ、資本と勞力の適度の協力で於て公平なる分配を重んじなければならぬと説いてある。それから三寶の恩に就て宗教心の缺損を指摘して、宗教は決して宗教だけの事ではない、宗教心が根本になつて人間の道徳心が顯れて行くのであるから、宗教を侮辱するやうな觀念は根本の重罪である。若し宗

教を侮蔑してしまへば、決定して一切の善根を燒盡するものである、宗教を滅した時宗教一つが無くなるのではない、必ず一切の世の中の善い事は根柢から燒滅される、これは重大な事である。唯物主義になつて來れば、世の中の善良なる事柄は皆な廢れて、權利利益の争奪のみが盛になつて來るといふ意味である。

斯様にしてこの罪惡の根本は四恩を中心にして説かれて居る、國王の恩、父母の恩、衆生の恩、三寶の恩をもとにして、それに背く者を最も重い罪として刑罰を行ふことになつて居る、現代の法律は權利利益を主にして定めた所に非常な間違ひがある、モツと道徳をもとにして、法律と道徳を接觸せしめれば宜かつたけれども、道徳上は非常な悪いことである、權利益の問題と離れて居るとそれは大した事に思はない、斯様なことになつて來て、今の法律は道徳上の制裁を横に置いて、權利利益を中心に

考へた法律であるが故に、社會がうまく行かぬ。兎に角法律は人を制裁するに於て、強い力を有つて居る、それが道徳と協力して行く意味に解釋されて居つたならば、世の中はモツとうまく行つたのではないかと思ふ。それは道徳だけでは動かないやうな墮落の時であるから、法律が必要であるけれども、その法律があまりに道徳から離れて、權利利益の觀念に趨つたが爲に、法律が手傳つて遂に道徳を破壞するやうな事になつて來た、斯ういふ點は大薩達と嚴熾王の話から推して考へると、現代の文明が誤つて居ることは明かだと思ふ。

それから戦争の話になつて、嚴熾王が戦争といふものはいつたい善い事であるか悪い事であるかと尋ねた、大薩達は答へて、戦争は事柄に依つては罪惡である、けれどもその性質が、若し叛逆者が不都合な奴で、それを膺懲しなければ多くの者が迷惑する、不當な者が勢力を得て多數の人民が殘虐をされると

いふならば、その不法なる者を膺懲しなければならぬ。又國と國の場合でも、正義の國が壓迫され、不正横暴な國が跋扈するといふならば戦はざるを得ない、だから戦争を絶対に否認するといふことは出来ない。併し戦争をするには少なくとも三つの注意が要ると言つて、道徳上に三箇條の考察すべき事が説いてある、それは要するに無暗に戦を起してはならない、それが正義の戦であるかどうかといふことに豫め注意しなければならぬ、その三箇條の考察の結果戦ふべしときまつた時には堂々と戦はなければならぬ。その時分の戦の仕方、殊に軍隊の精神を策勵する方法なども、詳細に説いてある、それは五つの事が軍隊精神の根本を成すのである、國王に對して耻しいといふ考を有ち、國王の命令を畏み従ふやうに、さうして背後には國民が控へて居るといふことを信じ、根本は國王の恩を忘れてはならないといふ風に、國王と國民の間に軍隊といふものがあつて、



上は王者の恩に報ひ、下は國民の倚託に反しないやうにといふことから軍隊の精神を練つて行く、さうして戦争をすれば負けることは無い。斯の如くにして不都合なものを膺懲する爲に起す戦争は決して罪悪ではないと説かれて居る、この位宗教に於て戦争のことに就て明白な意見を發表して居るものは無い、佛教は戦争を罪惡と見たとか、或はトルストイは基督教を非戰論だと言つたとかいふ話があるが、それは皆な不透明な頭腦から來たのであつて、大薩達經の如きは戦争に就て注意すべき點も教へて居るし、最後は戦争を是認して居る、尚に立派な思想である。斯の如く戦争のこと、刑罰のこと、道德のこと、國王の心得方といふやうなことから實社會の問題に入つて、生活の問題や、衆生恩の中に就ては勞資の問題までも説いてだん／＼話が進んで行つた。

そこから一轉して、王様は大薩達の話があまりに立派なものであるから、こんなえらい大薩達は釋尊で進襲して居る。この點は實に痛快を極めて居る、日本の今日の坊さんであつたならば、そんな事を言はれてもへへつと言つて笑つて居るだらう、それは從來の宗旨が多く釋尊を忘れて、眞言は弘法あるを知つて釋尊あるを知らず、淨土は法然あるを知つて釋尊あるを知らず、日蓮宗は日蓮あるを知つて釋尊あるを知らぬといふやうな、やはり薄馬鹿が多いのである、今大薩達が憤激した一節の如きは實に日本佛教徒を反省せしむる鐵槌である。

それも嚴熾王は明かに口に出してさう言つたのではない、たゞ僅にさういふ心がちよつて泛んだ、大薩達の言ふ話はまるで如來の正法にも比すべき立派な事である、彼は恐らくは釋迦よりも俺の方がえらいと思つて居やしないか、一つ聞いて見やうかなと斯う思つた、經文には

我れ今當に問ふべし、薩達尼乾子如來の所に於て尊重心を有するや否やを。

に對して尊敬の心を有つたらうかどうだらうかといふことを考へた、すると大薩達はその考を捉へて非常に憤激するのである。釋尊にどういふ缺點があるか、缺點が見付からなければその人よりもえらいといふことは考へられないではないか、私が思ふ所では釋迦如來ほど完備した人物は無いと思ふ、出家して佛に成られたのであるが、若し家においでになれば、今私があなたに話した理想の王様轉論聖王となつて四天下を有せられる方である、さういふ人に對して私が尊敬を有つとか有たぬとかいふことをあなたに考へるといふのは、私に對する侮辱である。何かと云へば餘程愚かな者でなければ釋尊よりもえらいといふやうなことは考へられない、非常な慢心をする者が薄馬鹿を除いては、釋尊に對して左様な觀念の起り得る餘地は無い、私が今精神を籠めて熱心にお話をして居るのに、この男は釋尊に尊敬心を有つかどうかなどといふのは甚だ怪しからぬと言つ

とある、釋尊の所に行つて頭を低げるだらうかと思つた、それに對して大薩達は非常に憤激したのである、まア考へて御覽なさい、釋尊ぐらゐえらい人が何處にあるか、智慧の方から言へば一切智、慈悲の方から言へば平等の慈悲、世間を利益せんが爲の故に活躍なさつて念々衆生を離れずして慈悲をおもちなされて居る、その釋迦如來に對して悔蔑の念を懐くといふやうなことがあるべきものではないといふ所から、釋尊の力の完備して居る事をあらゆる點から堂々と説いた、王様は弱つた顔をして居る。

その話に依つて嚴熾王は更に敬服をせられて「今までも釋尊はえらいとは思つたけれども、今のあなたの話を聽いて更に更にえらい方だといふ感激を新にした譯である、歡喜の心、信敬の心、愛念の心、慶悦の心が我が心に満ちて居ります」と言つた。それから「それならばこれから一緒に釋尊の所に參詣をしようではないか」といふので、嚴熾王と薩達尼



乾子とが相伴つて釋迦如來の所に參詣するのである。それから又釋尊の説法に移つていろ／＼弟子達に對してお話をせられた、その最後に眞の功德といふことの話に移つて、どうしても佛を信じ、教を信じ自分の行くべき道を信じて行かなければならぬ、中にも如來の眞實の功德を信することを出發點としなければ菩薩行は成立たない、信心、さうして悲心といふ關係が、やはりこの中に示されて居るさうして悲心より出でたる活躍が菩薩行の方便波羅蜜となつて居る譯である。

要するに方便波羅蜜は實際の人生に適應すべき活躍をして行くのである、それは政治の事にも經濟の事にも産業の事にも、一切の中に菩薩精神が織込まれて行かなければならない。それは坊さんが何も戦争をする譯でもなければ政治を執るのでもない、政治家、軍人、實業家の中に菩薩精神を織込んで行くのである、在家菩薩の精神としてそれ等の實際的の

かれてあるのであるから、それは時代が變れば多少は様子も變つて來るけれども、三千年の昔に説かれた教に斯ういふ意味があるとするならば、それを能く咀嚼し補綴して、實際人生に役立つやうにするこの爲に、佛教徒は努力すべきものである。何もかも今の時代に適應しないからそんな事はやらぬと言つてしまつては駄目である、前に引いた「出世間の境界を離れずして、世間諸有の境界に住す」といふ言葉に省みたならば大抵わかりさうなものだと思ふ。それを少しも考へず、少しも應用しないといふのは、あまりに氣の抜けた者ばかり居るといふことになつて、釋尊に對して申譯がないと私には思はれる。釋尊の教としては説いて／＼説き盡されて居る、たゞ佛教を信する者が最初に菩薩行が大事である。菩薩行の方便波羅蜜とは斯々の意味であるといふ問題を研究しないで、菩薩行などは要らぬことに考へて居るから、ましてや菩薩行の方便波羅蜜といふやう

活動を獎勵するのである。坊さんは坊さんとして教を宣傳する上に、社會順應の教化を爲して行く、又世間の人はその職業の中に菩薩精神を織込んで行く、簡單に言へば日蓮聖人が「五節句の時も南無妙法蓮華經」とか、或は「女房と酒打飲んで南無妙法蓮華經」とかいふ風に、世間即佛法といふ言葉を以て言ひ表されたやうに、實際生活の中に信心がはたらいて行かなければならぬ。信心はお寺に行つた時……佛壇の前に坐つた時……といふのではない、商賣をして居るその中に、實際人生の生活を辿つて居るその中に、菩薩の精神が活躍して行かなければならぬ。

さうしてそれは左程むづかしいことではない、簡單に言へばやさしい精神である、有難いと思ふ精神、和いだ精神といふことなのであるから、人は何時もこの菩薩の精神を以て活動しなければならぬといふことになる。これを整理して教として斯くまでに説くことはあたまたまから問題としない。さうして唯だ日蓮聖人の立正安國論が善いといふやうなことになる。つて行く、佛教には元來そんな思想はなかつたけれども、日蓮が日本人であつて、愛國心があつたから、立正安國論が出来たのだといふやうなことを、相當らしい人でも言つて居る。これに最初から反對して居るのは吾輩である、吾輩は日蓮聖人の獨創ではない、日蓮聖人は從順に釋尊の教を奉じたのであるといふことを絶叫して居る、釋尊は間の抜けたものだけれども日蓮に依つて國家的の佛教になつた「佛教そのものは間拔なものだけれども、日本佛法は氣が利いて居る」といふやうな頗る淺薄な解釋を、今でも大抵の人はして居るだらうと思ふが、それは實に良多いことで、大聖佛陀が出て來られたならば、日本佛教が何處が氣が利いて居るかと言はれるだらうと思ふ、實に耻しい次第である。今言ふ通り佛教の眞精神を能く調べて、それから



實際の發展應用を圖ることは宜いけれども、本來佛  
教の中に詳しく説かれて居ることを、そんな事は要  
らぬ事ぢやと言つて輕卒に飛出して行くといふのは  
甚だ間違つた態度である。モツと根本的研究に十  
分の努力を捧げて、さうしてそれを應用して行かな  
ければならぬと思ふのである。

大薩達經に云く

善男子よ菩薩復方便行を修して大利益を得るあり、  
是の故に菩薩應に方便波羅蜜を修すべし、涅槃清  
淨の境界を離れずして世間垢濁の境界を現するが  
故に、一處寂靜の境界を離れずして世間慣鬧  
の境界を現するが故に、禪定甚深の境界を離れず  
して世間王宮の境界を現するが故に、清淨無功用  
の境界を離れずして世間功用的境界を現するが故  
に、無生眞實の境界を離れずして世間の生此退彼  
退此生彼の諸の境界を現するが故に、能く一切四  
魔の境界を過ぎて世間降魔の境界を現するが故に

一切聖人の境界を離れずして世間凡夫の境界を現  
するが故に、能く出世間の境界を離れずして世間  
諸有の境界に住するが故に、一切智慧の境界を離  
れずして世間無智の境界を現するが故に、菩薩實  
際の境界を離れずして聲聞緣覺の境界を現するが  
故に、菩薩は應に方便波羅に住すべし、爾の時に  
世尊偈を説いて言はく、  
身口意は常に住す  
第一義の寂靜に  
衆生を利せんが爲に  
方便して世間に同す

(次續)



童話

鳥と梟の合戦

長谷川義一

ある森の中に、非常に仲の悪い、鳥と梟  
とが接んで居りました、鳥は、梟が晝間は目  
が見えませんが、知つてをりますから、晝間  
は、梟の巢へ喧嘩に行つては、多くの梟を踏  
み殺したりして、さうして、その肉を喰べて  
しまひます、梟は、夜は目が見えませ  
んから、夜になると、鳥の巢に攻め寄せて、  
多くの鳥を啄つき殺したりして、さうして、  
その肉を喰べてしまひます。

かうして、お互に、鳥は夜を恐れ、梟は晝  
を恐れてをりますが、喧嘩の止んだことはあ  
りませんでした。  
ある時、大勢の鳥が、相談を致しました。  
その時、一番智慧のある鳥が

「こんな風、喧嘩ばかりをしてゐては、  
いつまで経つてもきりが無い、終には、味  
方がへつてしまふから、今の内に何かかして  
梟の奴等を、みな殺しにしてしまふことを  
考へなければならんぞ、私は思ひます」  
と述べますと、他の鳥達も  
「さうだ、さうすれば、夜も安心をして  
寝ることが出来るが、然し、梟の奴等を皆な  
一週に殺してしまふ工夫はあるかね」  
「あるとも大ありだ、それは、かうするんだ  
私の頭を、あんまり痛くないやうに啄つて  
くれ、さうして、また、私の羽根や毛を抜  
くんたよ」  
「おかしいな、痛いよ、そんなことをしてよ

「い、んたよ、こつちには、ちやんさうまい  
考へがあるのだから」  
大勢の鳥は、寄つてたかつて、智慧のある  
鳥の頭を啄つき、さうして、羽根や毛を抜  
きました。

頭からは血が流れた、そして、身體には羽  
根や毛のない、まるで、大儲したやうな、儲  
れな妻になつた智慧のある鳥は、梟の巢の方  
に向つて飛び去りました。  
さうして、梟の巢の近くの樹の枝に止つて  
夜になると、悲しい聲で鳴きました、その聲  
を聞いて、一羽の梟は、巢から外の方に飛び  
出して、見るに、哀れな鳥が居りますから  
「さうした、頭は血だらけ、おまけに、  
羽根や毛もない、可哀想にね」  
「私は、大勢の鳥に、いちめられて、さうし  
ても、生きて行くことは出来ません、御願ひ  
ですから助けて下さい」  
と手を合せて頼みますから、梟も可哀想に



「おや、私の果にお出で、助けてやるから」  
 「ところが、大勢の鳥は、これを見て  
 「なんだ、鳥は喧嘩の相手だ、敵だ、なんぼ  
 なんでも、助けることなんか出来やしないか  
 「それともさうだけれども、困つて送けて来た  
 のた、おまけに、一羽ざりた、助けてやれよ」  
 鳥達も時々、鳥を助けてやることになり  
 ました。

月日が経つに従つて、鳥の頭の傷もなほり  
 羽根や毛も生へまして、今度は、綺麗な鳥に  
 なりました、鳥も、嬉しうな振りをして、  
 果の中で働いて居ります。

晝間は、外へ出て行つては、乾いた樹の皮  
 や、枯草を運んで来ては、果の中の天床や、  
 壁に、張つたり、又、床の上に敷きました、  
 寝になるご鳥は  
 「鳥や、一體、どうして、樹の皮や、枯草を  
 運んで来るんだい」

「これはね、この果は、寒くて困るたらう、  
 たから、果を暖かくするために、樹の皮や、  
 枯草を、張つたり、敷いたりするんだよ」  
 「さうか、それは、うまい考へだ、なる程、  
 暖かいね」

大勢の鳥は、枯草の上に寝轉んで、暖かい  
 ぐよ云つて、騒いで居ります。  
 「果の入口にも、澤山枯草を置いて、寒い  
 鳥の吹き込まないやうにしてやるよ」

「それは、有難いね」  
 鳥は、毎日、樹の皮や、枯草を、セッセと  
 運んで居りました。

ある日、朝から寒い風が、ビュー／＼と吹  
 いて来ました、晝頃には、大寒になつてしま  
 いました、鳥は、果の中で、寒い／＼と云つ  
 て、皆くつき合つて居ります、鳥は  
 「今日は、鳥鹿に寒いな、そろ／＼仕事にか、  
 ろうか」  
 と獨り言を云ひながら、澤山運んで来てあ

る樹の皮や枯草を、果の入口に積み上げて、  
 火をつけました。  
 枯れてる草木でありますから、焚付のやう  
 に、よく燃えます、火は、段々に果の中に燃  
 え移り、天床も、壁も、床も、一面に火の海  
 となりました、その上、鳥は、晝間は目が見  
 えません。

「火事だ／＼」  
 と叫びながら、マ／＼騒いで居る内に、  
 身體に火がつき、苦死んでしまひました。  
 智慧のある鳥の計略にかゝつて、火をつけら  
 れて殺されてしまつたのであります。

お互に、喧嘩をすれば、決して、よい事は  
 ありません、ごちからか、醜い目に會うやうな  
 事になります。

(雜賢藏經卷第十鳥象報怨縁より改作す)

### ◎北伊勢の新興勢力たる 追分教會所入佛式記

正法宣傳の道場が新に地上の一角に創設せ  
 られたる一事を報道して讀者と共に喜をわか  
 ちたい。本誌にも屢々報道せる三重縣三重郡  
 日永村の追分教會所は昨年十一月十七日付縣  
 廳の認許も得堂宇も完成したるを以て、大僧  
 正本多日生現下の御臨場を得て天童音樂開堂  
 入佛の式典を舉行した。時は三月廿一日春季  
 皇靈祭の翌日先づ午前十一時四日市驛に總代  
 信徒等多数は本多現下を御出迎へ一里余の道  
 を自動車にて尾張屋材木店へ御案内御少憩、  
 午後二時打上ぐる煙花を合圖に尾張屋前に整  
 列、支應旗を先頭に樂人三十余名の稚兒に  
 隨喜参列の僧員多数を加へ教會所に練込む。  
 富田常英法師の捧持する法華八輪を奉安すれ  
 は總て大法要に移り本多日生現下開堂慶讃文  
 始め各地より祝辭祝電數十通あり未曾有の盛  
 典なり。

慶 讚 文

昭和三年三月二十一日追分教會所建築功成

「開堂式ヲ舉行ス同志ノ僧俗男女四方ヨリ  
 集會シ莊嚴ナル法要ヲ修行シ正法輪ヲ轉ス  
 此日天氣晴明春風融法悦歡喜ノ聲堂ニ滿  
 フ奉安スル所ハ本門當住ノ三寶堂ニ諸天善  
 神ナリ教會所建立ノ目的ハ正法興隆皇道繁  
 榮國運隆昌萬民快樂ノ爲ナリ夫レ正法ヲ護  
 持スルハ人中ノ最勝事ニシテ經ニハ正法ヲ  
 護持スル因縁ヲ以テ此ノ金剛ノ身ヲ成就セ  
 ヲト願ハクハ法輪常轉化導成辨由ツテ以テ  
 發起贊助ノ男女同シク現當二世ノ所願ヲ成  
 就シ各々志ス所ノ先祖累代ノ善業佛果莊  
 嚴ナラシメマヘ仍テ慶讚文一章如件

追分教會所開堂式席上

大僧正 聖應院日生積首  
 檀家總代太田氏始め安樂寺總代、名古屋婦  
 人會員等の燒香あり樂人の奏樂裡に式を閉づ  
 ▲午後四時より大講演會を開催「開會の  
 辭」大田覺太郎氏に次で本多現下は「佛陀設  
 化の本意に就て」詳々二百餘の聽衆に佛法

輪ありたり、「開會の辭」田久保本誓師にて全  
 く終了した因に本教會職工に至るまでの同志  
 僧正の御遊方を特記したい尙四日市より田久  
 保師定例出張して教化に努めつゝあり。

四日市報泗水を彩ぐる本多現下大講演

▲三月廿一日仰望し止まざりし本多日生現  
 下は久々にて御來酒を得て日蓮主義大講演  
 會を開催する事が出来た、會場安樂寺本堂  
 聽衆約百五十名「開會の辭」田久保師に次  
 で「法華の妙行」を題され本多現下は約二  
 時間にわたり空調を垂れ給ふた▲三月二十  
 二日安樂寺彼岸大法要午後二時より田久保  
 山主導師の下に法華後講演「靈壽草」吾人  
 の信仰」加藤國顯師ありたり。

治田に於ける野口臺下の監督布教

▲三月二十五日員辨郡治田村寶成寺に樞大  
 僧正野口日主臺下の御來遊を願ふた同地は  
 僻遠の地に於て四日市より六里の山道に  
 あり昨年まで無住なりし爲眞に機運に向て  
 年五月號に報導した如く再興の機運に向て  
 居るが、かかる陋屋に御遊錫を乞ふたのは  
 恐多き事であつた。同日午後二時より日餘  
 の聽衆に「護法の精神」布教師三谷會善師  
 「法華の信仰と善護行」樞大僧正野口日主  
 台下同日午後七時より「日蓮上人の性格」  
 田久保本誓師「佛敎の六善事」三谷布教師  
 「法華經宗の信仰と娑婆即寂光の願行」野  
 口臺下あり多數未信の徳本啓發したり。









次 目

信心と精進……………	本
菩薩行に就て……………	本
寶物集……………	平
治法要旨……………	先
良齋問話……………	安
聖訓摘要……………	本
噯國友日斌上人……………	山
各地教信……………	内
	櫻
	溪
	生
	信
	稿
	頼
	生
	生
	多
	日
	日
	康
	儒
	造
	積
	多
	日
	多
	積
	安
	先
	平
	本
	本